
真剣で私と勝負しなさい！

カンパチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私と勝負しなさい！

【Nコード】

N1313P

【作者名】

カンパチ

【あらすじ】

平凡な学園生活を送る為に力を隠して生活しようとする今井猛。しかし彼の願いは早々に打ち砕かれて……。

1話 風間ファミリーの皆さん・1

SIDE大和

瞼に差していた日の光が遮られ、黒い影に覆われる。

「おはよう大和、そして好き」

いきなりズボンを脱がされそうになるが体を捻って脱出。

「わお、立派な松茸」

……勢いが余りすぎて中身が見えてしまったようだ。

「お、おはよう京。お友達で」

「……フラれた。悲しいからその松茸やけ食いしていい？」

「食べたたらお腹壊すから、めっ」

「ちえ」

朝から捕食されそうになりました。

+

川神学園に通う生徒が暮らす島津寮。

俺、直江大和と椎名京。

新ジャンル・健康的な不良こと源忠勝。

一年生の剣道娘、黛由紀江。

我らがリーダー風間翔一の3男2女が暮らしている。

島津寮は1階に男3部屋、2階に女3部屋があるので1部屋空い

ている。

そして、育ち盛りの万年栄養欠乏児共に食事を作ってくれているのは麗子さん。名前の通り麗しい方だ。

「ほらーっ、ガクト！ 早くしなさいよ！ 大和ちゃん達行っちゃうよ！」

隣の島津家から大きな声が聞こえる。

「うるせーな！ あんまり恥かかせんな母ちゃん！」

ちなみに、島津岳人の母親でもある。

「やあ、名前負け」

「いきなり喧嘩売ってんのかてめー！」

「冗談だ。今日も超かつこいいぞ」

「おいおい、よせやいいきなり本当の事を」

今日も平和だ。

+

俺と京とガクト3人で多馬川沿いを歩いていく。

「やー」

今日発売のマジガンを見ながら歩いてくる男も合流。

「おはよう師岡卓也。2-F所属趣味ネットや漫画」

「なんだかえらく説明的だなあ」

「モロは影薄いから存在を確認しないと忘れそうぞ」

「朝一で酷い事言わないでよ！」

だらだらしながら川沿いを4人で進んでいると前方に数十人の人だかりが出来ていた。

ふと、一つ年上の最強暴力女の顔が浮かんだ。

「いてっ」

突然頭部に刺したような痛みを感じ、振り向くとたった今考えていた少女が立っていた。

「だーれが最強可憐暴力美少女だって？」

考えていただけなのに……可憐や美少女は考えてもいないけど。黒髪を靡かせながら頭部にチョップを入れてきた彼女は川神百代。

「あれ？ 姉さんがここにいてるって事はあそこで取り囲まれてる人は？」

「おー、いかにも田舎くさい輩に絡まれてるな。助けてやろう。超加速！」

言うが早いか姉さんは不良達のもとへ駆けていった。

「百代先輩が行ったなら一安心だね」

「いやいや、弟分としてはむしろやり過ぎないか心配だよ」

と、言っている間に不良達がピンボールのように空を飛んでいく。

「飛んでる飛んでる。隣の七浜まで飛んでいくんじゃない？」

「漫画じゃあるまいし、精々2〜3キロだろう」

「いやそれ充分漫画並だから！」

あの速度で落下したらただでは済まないじゃなかるうか。

「なあ京。あれ着地する時どうなるんだろうな」

「さー。私はここにいる皆とモモ先輩プラス2人がいれば後はどーでもいいから興味ない」

「ジロンだな」

「難しい言葉知ってるね。超天才」

「ふふん」

「皮肉だよ今の」

全員を倒し（飛ばし）終わった姉さんの方を見ると絡まれていた少年が姉さんに話しかけていた。

＋＋＋＋＋

SIDE百代

「助かりました。歩いていたら目つきが気に入らないとか難癖つけられて困ってたんです」

「なに、どうせあいつ等の目的は私だ。迷惑かけて済まなかったな」
「いえいえ、助けて頂いた事には変わりありませんから」

目の前の少年と話していると大和達がやってきた。

「姉さん……は大丈夫か。その君、怪我不い？」

「あ、はい助けて頂いたので大丈夫です」

「おい、弟。私の事も心配しろ」

「（無視）そつか、良かった。俺の名前は直江大和。君は？」

「俺……僕は今井猛タケルです」

「心配しろ心配しろ心配しろ」

「（ナデナデ）見た事ないけど転入生かな？」

「今日から川神学園に転入だったんですけど、初日だったんで早めに登校したのが運の尽きでしたね」

「災難だったね。何年生？」

「2年です」

「同級生か、敬語はいらないよ」

「なら普通に話すねって言いたいところだけど職員室寄るからもう行かなくちゃ」

「ああ、また」

大和と挨拶を交わすと私に一礼して学園に走っていった。

助けたの私ただけだなー。大和の方が仲良くなるのはおかしくないか。

それにしてもあの身のこなし……ワン子といい勝負か？

本気を出せば倒せただろうに。何故力を隠すのかわからんが、機会があつたら戦ってみたいな。

「みんなーっ、おはよーっ」

おっと噂をすれば愛しの我が妹がタイヤを引き摺りながら走ってきた。

「おはようワン子。2-F所属趣味鍛錬」

「なによーそれ」

「ワン子が影薄いから忘れないようにだと思っよ」

「モロと違ってこんな可愛いワン子を忘れるわけない」

「一言一言がきついよー!」

趣味鍛錬か。いつかは言わなくちゃいけないんだろうが、も

2話 私と決闘しなさい！

SIDE大和

眼前に聳えるは世界遺産と見間違うであろう立派な木造作りの正門。中央には川神学園と書かれた看板が立て掛けられており、その奥には白い鉄筋校舎が学生達を待ち構えている。

「ではここで。多いに学べ若者達。もぐもぐもぐもぐ」

1人3年生の姉さんは、早弁しながら3年のA棟へ。僕達5人は2年のB棟。教室に入り、大きな声で。

「おはよー」

ワン子が元気に挨拶。

「おはよーっ！」

それに習うように負けじと挨拶をする。

「おはようございますー」

「おはよー」

女子達から気持ちの良い挨拶が返ってきた。

「おつす大和ー。今日転入生が来るらしいぜ」

「ああ、今朝会ったよ」

「まじかよ！ 美人だった？ 胸とかあった？」

「男だったよ」

「なんだよ、つまんねーな」

矢継ぎ早に質問してきた男は福本育郎、あだ名はヨンパチ。あだ名の由来は朝から言うようなものでもない。

「当日まで何も言わないなんて、梅先生忘れてたのかな」

「ヤローの話なんてどうでもいいぜ」

性別を知った途端、興味をなくしたのか自分の席へ戻っていく。

「男子はロコツよねー」

ワン子が呆れたように言い放つ。

「おい大和、博識なお前なら知ってるだろ。ロコツって何だ？」

「良く学校入れたよねガクト……」

ワン子以下の学力を持つ仲間に同情の視線を送る。

キンコーンカーンコーン。

チャイムが鳴ったので、皆の雑談がピタリとやんだ。

「皆さーん。小島先生きますよー」

我がクラスのマスコット兼委員長の甘粕真与がそう言うと廊下からカツカツと足音が聞こえてくる。

「朝のHRをはじめる」

「起立！ 礼！」

皆が元氣よく挨拶した。

「おはよう！ 着席して良し。あー、出欠を確認する前に転入生の紹介をする。入って来い」

梅先生に促されると教室に一人の男子が入ってくる。

黒髪黒目。端正な顔立ちをしているが目つきが鋭く、中々に鍛えてありそうな身体。身長は180程だろうか。間違いなく今朝の彼だ。

「えー、ただいまご紹介に預かりました。今井猛です。宜しく願います」

転入生、今井猛が教室全体を伺いながら一礼する。

「よし、何か質問あれば挙手していけ」

「はい！ 彼女はいますか？」

「彼女はいません。モテないし」

「これだからスイーツは」

「うつさい。サルには聞いてない。じゃあ、立候補とかもいいのかなあ？」

ガヤガヤと騒がしくなってくる教室内。

「静粛に！ 小笠原。そういう話は二人っきりの時にしてやれ」

梅先生が鞭で教卓を叩くと一瞬で静かになる。ここで歯向かう命知らずはいない。

「他に品位のある質問はないか」

「はい質問！ 何か武道はやってるのかしら？」

「えーと……。剣術を少しだけ」

「YES！！ 梅先生提案！」

ワン子が嬉しそうに立ち上がる。

「転入生を“歓迎”してあげたいと思いますーす」

ワン子の言葉を聞き再び教室が騒然とする。

「ふふっ、血気盛んだな川神。だがそれは面白い。今井。そのポニテールがお前の腕前を見たいそうだ」

「腕前？」

「川神学園には決闘っていう儀式があるの。決闘の意思を伝え、自分のワッペンを机に置く」

一呼吸おいて、高らかに。

「タケル！ 戦闘で勝負よ！」

「ごめん無理」

盛り上がっていた教室内になんととも言えない冷たい空気が流れる。

「戦いたいの山々なんだけどちょっと肩壊してて」

そう言つと右手で左肩を抑えるそぶりを見せる。

「そつ……なら仕方ないわね」

目に見えて落胆するワン子。お預けされた犬にそっくり。

「やる気満々だったのにね。ワン子」

「怪我してるなら仕方ないよ」

「……」

教室に入ってからずっと無口だった京を見ると何やらタケルを観察しているようだ。

「どうした京？」

「……別に」

教室で言葉が少ないのはいつもの事だからそれは気にしない。が、明らかに何かを考えているようだった。

十

昼休みになった。

「うおおおお！ 開幕ダッシュー！！」

「ガクトてめえ！ フライングしてんじゃねえ！」

学食組は猛ダッシュで戦場（食堂）へ向かった。

「タケルは教室で食べるんだ？」

「ああ、自分で作った方が安いし」

「じゃあ一緒に食べようか。色々話したいし」

「料理作れるなんて凄いわ。ソンケーしちゃう」

「ワン子は食べる専門だもんね」

教室組の風間ファミリーで卓を作り、タケルを呼ぶ。

俺は学食、教室のどちらでも食べるようにしている。その方が知り合いを作りやすいから。

「次のニュースです。昨日の午後7時頃、埼玉県深谷市の飲食店で無銭飲食をした男が居合わせた男子学生に取り押さえられました」

「取り押さえたの男子学生だって。イケメンかな？」

「チカちゃん。今井君は？」

「イケメンである事に越した事はないじゃん。だってイケメンだし」

「男を取り押さえたお手柄男子学生は、神奈川県川崎市在住の風間翔一さんで……」

「ぶはっ」

「うわああああ」

ワン子による突然の牛乳攻撃を避けられなかったタケルが悲鳴をあげる。

「あ、ゴメンふいちゃったわ」

「大丈夫だよ……大丈夫……」

トボトボと流し台に向かっていくタケル。背中から哀愁を感じる。

「ちょっと今の風間くん!？」

「……他にいないよね」

「今度はテレビかよ」

「前回の新聞からグレードアップしたね」

「……」

「浮かない顔してるね」

「心労が増えるというか」

「だめだ、キヤップ携帯でないや」

「そのうち帰ってくるだろう……」

我らがキャップは自由すぎる男だったとさ。

2話 私と決闘しなさい！（後書き）

ようやく主人公が合流！

次回からようやく主人公視点で物語が展開していきます。

3話 イマイタケル

SIDEタケル

帰りのHRも終わり小島先生が教室から出て行く。

同時にガヤガヤと騒がしくなり友達に声をかけながら教室を出て行く人が多い。

大和と一緒に帰らないか？ と誘われたが疲れている事を理由に断った。

何よりも後ろにいた京の視線が怖かったのが一番の理由だが。

十

立ち並ぶ店や標識を覚えながらだらと帰宅する。こんな事なら大和に街の案内をしてもらえば良かったかもしれない。

30分程歩くと2階建ての少し古いアパートが見えてきた。1階の1番奥が俺の部屋だ。

部屋に入り、積まれたままのダンボール類を見ながら思う。

一昨日この部屋に引っ越してきたばかりなので実感はないが、初の一人暮らしにしては中々上等な部屋だ。

台所もしっかり有り自炊する分には問題ないし、トイレと風呂も部屋についている。

自分の我侭を許してくれた両親にはお礼を言いたいが……。

「あんたにピッタリの学園があるからそこにしなさい」

という母さんの言葉が思い浮かぶ。

違う！ 違うよ母さん！ あんな奇人変人怪物動物のオンパレード学園じゃなくて、手と手が触れ合っただけで頬を染めたりする女

子がいたり、悪友と好きな女子を言い合ったりする甘酸っぱい青春を送れるような学園が良かったんだよ！

「……なんて贅沢言えないよな」

自嘲気味に呟き、敷いたままの布団に大の字になって倒れる。

「楽しそうな学園ではあるしな」

賑やかなクラスメイト達の姿を思い出しそっと目を閉じる。

「……今度は失敗しないようにしないと」

十

一夜明け、川神学園。

教室には昨日見かけなかったバンダナの男子が大和たちと共にいた。

「お前がマイケルか！ 大和から話は聞いてるぜ！」

その男は突然外国人の名前を叫びながら俺に話しかけてくる。

「マイケル？ 誰の事だ」

「イマイタケル！ 略してマイケル。ピッタリだろ！」

太陽のように微笑む彼に何も言えなくなってしまった。

「……好きに呼んでくれればいいさ。ところで君は？」

「俺は風間翔一。冒険家だ！」

「風間っていうと大和たちが良く言ってる風間ファミリーの風間？」
「おう！ 風間ファミリーのキャンプだ」

俺たちの会話につられてか徐々にまわりに人が集まりだした。

「キャンプには中々いいあだ名つけるじゃない」

興味深そうにこちらを伺うワン子。

「マイケル？ 髪も目も黒いのに？」

「でも顔は掘り深いし、いいんじゃない？」

ヒソヒソと話し声が聞こえていたかと思うとこちらを向いて。

「マイケル！ マイケル！」

「マイケル！ マイケル！」

「マイケルーマイケルー」

なんかちょっとしたイジメにあっている気分です。

「皆さん。そろそろ小島先生きますよー」

小島先生は今週の金曜日にドイツのリューベックから転入生が来ることを告げるとHRを終えて教室から出て行った。

「マイケルに続いてまた転入生か」

楽しくなってきたと言わんばかりに目を輝かせる風間。

「ドイツって事はマイケルと違って本物の外国人よね」

「え、俺って偽者呼ばわりなの？」

新事実にがつくりと肩を落とす。

「そう気を落とすなよ。マイケル（偽）」

「マイケルは偽じゃないよ！ ガクトって名前の方がよっぽど偽じゃないか！」

「喧嘩売ってんのかてめー！」

「……おじさん。ずっといるんだけどな。授業はじめてもいいのかな」

悲しげに呟く中年の男性が教壇の前で黄昏ていた。

十

数日経ち、すっかりマイケルのあだ名が定着してきた。

今日は人間力測定。

簡単に言えば身体測定と体力測定一緒にしたようなもの。らしい。

「あああやっぱりもう身長止まってるー！」

「俺様のように鍛えろモロ。握力計振り切れたぞ」

「筋肉つけると余計縦に伸びなくなるような」

身体測定はいいとして体力測定か。どうするかな。

「握力78か……80はあると思ったが」

「十分強いよゲンさん。ガクトは脳筋だからさ」

やっぱり目立たないくらいがいいんだろうけど。

「大串スグル。握力を測定しろ」

「STRは苦手なんだよなあ俺は魔術師系だから……」

「31か。情けないぞもつと鍛えておけ」

でも平均つてどのくらいなんだろうな。

「次、今井猛。握力を測定しろ」

大和ぐらいが平均なのかな。

なんて考え事をしていたのが悪かったのか。

「む？」

無意識に握った握力計の針は勢いよく振り切れ、外れた針はその勢いのまま床に突き刺さった。

「今井猛。測定不能！ただ力があるのは良いが一応備品なんでな。壊さないでくれると助かる」

「え、あ……ちが」

一瞬自分でも何をしたのかわからない状況で一生懸命言い訳を考える。

「マイケルすごいじゃん」

「ふ、ふん！俺様の筋肉ほどじゃないけどな」

「ははっ……」

俺は床に突き刺さった針を抜きながらただただ苦笑いするしかなかった。

4話 偶然？必然？

SIDEタケル

人間力測定も終わり昼休み。

いつもどおりのメンバーに普段は教室で食べないガクトも加わり、購買で買ってきたであろうパンを食べながら談笑していた。

「それにしてもマイケルってガクトより力あったんだね」

「おいおい俺様だって握力計壊しただろ」

「でも針はすっ飛ばなかったし」

まずい。話がおかしな方向に転がろうとしている。

「単純にバネが緩んでて針が取れやすかっただけだと思うよ」

精一杯話題を逸らそうとしてみるが追求は止まらない。

「でもガクトが壊したばかりで新品だったよ？」

「不良品だったんだよ」

「でもあんなに勢いよく床に刺さるかなあ」

うーんと腕組みしながら納得のいかない表情を浮かべるモロ。

「うだうだ言ってるねーでここは男らしく俺様と腕相撲してみようぜ」

「あ、それいいね。じゃあ僕がレフェリーやるよ」

「あーいや。俺は肩が……」

「大丈夫だって。左肩でしょ？ 右なら握力測定も普通に出来てたんだし」

まいった。八方塞がりじゃないか。これ以上断るのも怪しまれるだけだし。

わざと負ける？ それとも勝つ？

前者は確かに効果的だろうがちょっとわざとらしいか？
でも勝つって言うてもなあ。いや、やり方次第かな。

……少し賭けになるが死中に活ありって偉い人もいつてたし、やるしかないか。

「はい、組んで組んでー。レディー……ゴー！」
「どりゃあああああ！！！」

ガクトが力を入れきるよりも早く。その丸太のような腕を倒しきる。

「……あり？」
「はい。マイケルの勝ち」

きょとんと目を丸くしているガクトを尻目に結果を告げるモロ。

「い、今のは油断してたんだ！ チカリンのウイナー食べる口元がエロそうだなーって見惚れてて」

「変態だ」

「変態」

「変態ね」

「うわっきも」

「もう少しマシな言い訳なかったのガクト……」

男子数名がわかるわかる。と頷いているのはこの際無視しておこう。

「とにかく！ もう一度だ！」

「だって、いい？ マイケル」

「ああ」

「同じ奴に二度負ける俺様じゃないぜ！」

鼻息荒く手を組んでくるガクト。

「いくよー？ レディー……ゴー！」

「ぬりゃあああああ……！」

しかし先ほどの光景が再び繰り返される。

「バカな！」

先ほどの変態発言のせいで注目していたギャラリーから歓声がある。

「実は腕相撲は単純な力じゃないんだ。コツがあるんだよ」

「モロの合図……だろ？」

解説をしようとしたら先ほどまでギャラリーに徹していた大和がニヤリとあくどい笑みを浮かべながら話しに入ってきた。

「」名答」

俺は少し驚いた。そこに気付くという事は、誰もが注目しているはずの俺たちの腕の交差の他に、俺の目線にも注意を払ったという

事だ。もしかしたら目が良いのかもしれない。

「ガクトはゴーの合図で力を込めていただろ？」

「そりゃゴーの前に力を込めたら反則だからな」

「マイケルはゴーの瞬間には既に力が込め終わってたんじゃないかな」

「その通り。すごいね、たった2回で見抜くなんて」

「反則してたのか。それなら俺様が負けたのも納得だな」

「いや少し違う」

大和がモロを見る。

「マイケルはモロの唇を見ていた。モロが『ゴー』という瞬間の唇に注目していたのさ。合図を聞いてから力を込めていたガクトは既に分が悪かったって事だよ」

どうだ。と言わんばかりに大和がこっちに向きかえる。

「まいった。全部言われちゃったな。その通り。これはテクニックだからどっちの力が上かっていうのはあんまり関係ないんだ。むしろガクトは筋肉がついている分、力を込める瞬発力には劣るかもしれない」

ガクトは関心したかのようにしきりに頷いていた。

「でもマイケルの力が弱いつて事にはならないよね」

うまく誤魔化したと思ったのにモロが更に突っ込んできた。

「こんな小細工する人間が強いわけないだろ。単純に力比べじゃ勝

てないから無い知恵振り絞って頑張ってるんだよ」

でもなあとかくモ口を無視して食べかけの弁当にかじりつく。

十

背筋の凍りつく思いをした昼休みから一転。

家に帰って現実逃避をしようと思っていた放課後にある人物から声をかけられた。

「ねえゲーセン行かない？」

師岡卓也。何故こいつはこんなにも俺に構うのだろうか。

ここ数日話してた限りでは大して興味も持っていなかったようだったのに。やはり人間力測定での一件か。

「新しいパンチングマシンをお店が仕入れたって話をしたらガクトがマイケル誘うって言い出してさ」

「次はパンチングマシンで決着だぜ。これなら変なテクニクは通用しないからな」

どうやらガクトはまだ根に持っているようだ。

しかしまた力比べなんて面倒くさい事に巻き込まれるのは真っ平ごめんだ。俺はNOと言える日本人。

「ストVの稼動も今日からだからスグルもどう？」

「パスだ。今日はオータムの名シーンを編集して動画サイトに上げなければならぬ」

ストVだと！？ そろそろ稼動だとは思っていたが今日だったの

か！

畏だ。これは確実に畏だ。そうわかっていても格ゲーマーの血が騒ぐ。

「ストVやるだけならいいよ。俺のシンリーがどう進化したか確認したいし」

「あ、マイケルもストVやるんだ？ 僕も結構強いよ。勝負しよう」

思わず降って湧いた甘い飴にまんまと引っかかった俺は意気揚々とゲームセンターへと歩みを進めていた。後から降り注ぐ鋭い鞭の存在を忘れたまま。

十

『YOU WIN！』

「……マイケル強すぎない？」

たった今俺に10連敗したモロが隣に腰掛けてきた。
アヒルのような口をして不満気な顔をしているのを見て女装したら相当可愛くなるんじゃないかと思ってしまったのは内緒だ。

「慣れだよ慣れ。おつと乱入者だ」

「ザンギユラか……上級者が使えば怖いキャラだけど。動きを見る限り初心者っぽいね」

モロの言つとおり相手は動きの遅いドロップキックを連発してくる。ひらりとかわして流れるようなコンボを入れる。

『YOU WIN！』

「あれ？ 連コしてきた」

「2ラウンド続けてパーフェクトで負けたんじゃ流石に悔しいんじゃない？」

「そっか。まあ容赦はしないけど」

『YOU WIN!』

「はやっ！ 秒殺だよ！」

「ほんと容赦ねーな」

UFOキャッチャーをしているOL風の女性を凝視していたガクトが戻ってきた。

「おかえり。変態」

「変態じゃねーよ！ そこに尻があるから見ろ。それが男ってものだろ！」

男を言い訳にしないでもらいたい。一緒にされちゃう。

「このまま一気にボスまでいっちゃおうよ」

「ざーんねーん。君たちの冒険はここで終わってしまった」

筐体の影から見るからに清楚や無垢とかいう単語とは正反対の人々が現れた。

「ちょっとお前ら表出るや」

あれ、俺やりすぎた？

十

夕方の商店街。人通りをは決して少なくない中、俺たちの前に立ちはだかる揃いの赤いＴシャツを着ている男が6人。

少し前に流行ったカラーギャングというやつだろうか。

「財布出して土下座すれば許してやんよ」

苛立った様子でくちやくちやガムを噛みながら提案というにはおこがましい発言をしてくる。

こうなったのも俺のせいだ。二人に怪我させるわけにはいかない……か。

「モロは俺様の後ろに隠れてろ」

「う、うん」

え、ガクトさん？ なんですかそのフラグ。ワタクシ今まさに財布を取り出す瞬間なんですけど。

「ダブルリアート！」

「なにはぐっ！」

「ばぐあ！」

ガクトが両腕を真横に突き出し、不良二人の首を刈る。

「てめえ！ 何してんだごらあ！」

……そりゃ怒るよね。仕方ない。みんながあつちに注目してるなら。

「シッ」

目の前にいた二人の顎を指で軽く弾く。すると不良達は糸の切れたマリオネットのように地面に倒れた。

「これでよしと。あれ、モロは？」

「わああああ！」

まずい！ モロが狙われたか！ かなり遠くまで逃げている……間に合うか！？

「モロッ！」

パタリ

俺が駆け出すと同時に白い何かが不良の頭に当たりそのまま地面に倒れこむ。

「！ 大丈夫かモロ！」

「うん……何故か勝手に倒れて……」

モロの安否を確認した俺は地面に落ちていた白い物体を恐る恐る手に取った。

「これは……消しゴム？」

それは確かにどこにでもある消しゴム。仄かに香る甘い匂いは持ち主が女性である可能性を示唆していた。

「モロー。無事かー」

少し遅れて最後の一人を倒したガクトが駆け寄ってくる。

「大丈夫。問題ない」

「俺様見てなかったんだが、マイケルも二人倒したみたいだな。やつぱつえーよ」

「がむしゃらに腕振り回したら偶然、顎に拳が入って脳震盪起こしたみたいだよ」

「……また偶然？ 運命の女神フォルトウナでもそこまで偶然重ならないよ」

「おいモロ。女神って裸なのか？ エロイ体してんだろうな」

「あーもう！ ガクトは黙ってて！」

俺は投擲物に気をとられ、不良達が一瞬で倒された事に騒然としている現場から立ち去る青みがかった紫色のショートヘアの少女を見逃していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1313p/>

真剣で私と勝負しなさい！

2010年12月25日21時59分発行